

建学の精神とキリスト教 - 501 【第3回】

新島襄の生涯 (2)

同志社大学 神学部教授
良心学研究センター長
小原 克博

1

1

「ジョゼフ・ニイシマ」の時代
1865～1874年

3

Overview

1. 「ジョゼフ・ニイシマ」の時代
1865～1874年
2. 「新島 襄」の時代
1874～1890年

2



4

ボストンへ

- ボストン到着後（1865年7月）、行き先がなく船底で途方に暮れる。
- テイラー船長が船主のハーディーに新島を紹介する。

5

ハーディーとの出会い

- ハーディー宛の手紙
 - 「日本脱出の理由」、『新島襄 自伝』16-27頁
- ハーディーは新島の名前を「ジョー」から「ジョゼフ」に改称する。
- 以降、新島は Joseph Neesima と自称する。



6

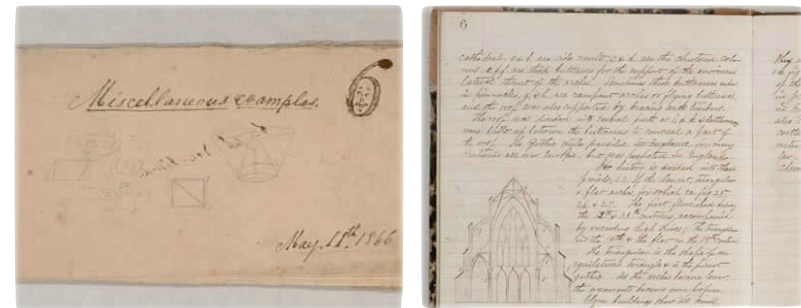
アメリカでの学び (1)

- フィリップス・アカデミー時代
 - 1865～1867年。
- 1866年、アンドーヴァー神学校付属教会で洗礼を受け、クリスチャンになる。

7

アメリカでの学び (2)

- アーモスト大学時代（1867～1870年）



8

Help Log in

Search:

Campus directory Find alumni Site map

Go directly to...

Home > About Amherst > Amherst History

A History of Amherst College

In 1821 a broad group of local people in and around Amherst worked together to create an institution of higher learning for the education of indigent young men of piety and talents for the Christian ministry (as the call for donations to the initial endowment, the Charity Fund, phrased it).

About Amherst

Amherst at a Glance

Amherst College Profile

Amherst History

Amherst College Press

Amherst Timeline

Amherst's Philosophy

Corporation & Trustees

Frequently Asked Questions

Mission of Amherst College

President's Welcome

Virtual Tours

Visiting Amherst

Noah Webster, already well known from his textbooks and dictionaries, played a vital role in fundraising and in shaping the institution. He had served as a trustee of Amherst Academy since its incorporation in 1815, and was president of its board of trustees during the critical 1820-21 period, when Amherst College was formed. Webster had been on the committee formed in 1820 to...

Edward Jones, Class of 1826

Joseph Hardy Neesima, Class of 1870

9

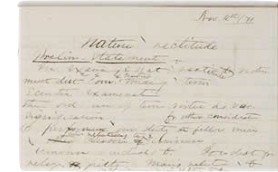
ヨーロッパ視察

- 教育視察
 - 木戸孝允、田中不二麿らと出会う。
- ベルリンで報告書作成
 - 後に文部省から『理事功程』として出版される。

11

アメリカでの学び (3)

- アンドーヴァー神学校時代
 - 1870年～1874年
- アメリカン・ボードと一体の学校。
- 在学中「岩倉使節団」と出会う。
- 一年間、休学してヨーロッパへ。



10

宣教師として帰国

- 準宣教師に
 - 1874年、アメリカン・ボードから準宣教師に任命され、日本に派遣される。
- 帰国前の改称
 - Joseph Hardy Neesimaに

12

ラットランド演説

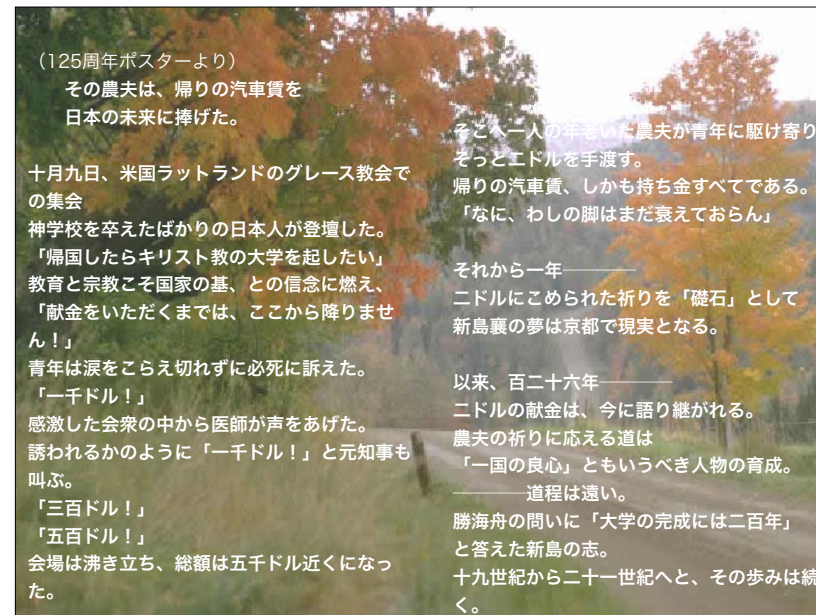
- 日本に基督教の学校を作りたいという涙ながらの訴えをする。
- 5000ドルの献金を得る。これが同志社の開校資金となった。

13

2

「新島 襄」の時代 1874～1890年

15



14

帰 国

- 名前の日本表記
 - 在米中、「約瑟」（ジョゼフ）
 - 新島 讓 → 新島 襄
- 安中で基督教伝道
 - 安中教会の誕生、湯浅治郎の働き

16

大阪へ（1875年）

- 大阪のゴードンのもとへ
- 神戸のデイヴィスの賛同を得て、キリスト教学校設立を目指す。
- 大阪での挫折
- 学校設立が頓挫する。

17

京都での出会い

- 山本覚馬 との出会い
- 「私塾開業願」を府に提出
- 新島と山本が発起人
- 山本が「同志社」と命名



18

京都での開校

- 同志社英学校の設立
- 1875年11月29日（教師2名、生徒8名）
- 現在の「新島旧邸」「新島会館」の場所
- 翌年正月、山本八重と結婚
- 八重は戊辰戦争の際、会津若松城に籠城し「西軍」と戦闘

19



2013年、NHK大河ドラマ「八重の桜」



20

今出川校地の始まり

- 1876年、校地を移転
- 同志社への攻撃
 - 仏教徒や保守的な市民からの激しい攻撃
- 「熊本バンド」の入学

21



22

教会の形成

- 1876年、三つの教会
 - 後に平安教会、同志社教会となる。
- 宗教者としての新島
 - 牧師、宣教師としての活動

23

新島の晩年の関心（1）

- 教会合同運動
 - 長老派と会衆派の合同運動に対し、新島は批判的な立場を取った。
 - 「自由教育」「自治教会」が新島のモットーであった。

24

新島の晩年の関心（2）

- 同志社大学設立運動
 - キリスト教主義に立脚する総合大学を設立することは、新島の「宿志」であった。
 - 募金運動、欧米旅行
 - 1886年、宮城英学校（同志社の分校）を設立。

25



27

新島の最期

- 1889年、関東での募金活動
 - 前橋で倒れ、神奈川県大磯で療養。
- 1890年1月23日死去（46歳）
 - 遺言（『新島襄 自伝』400-402頁）
 - 「**倜儻不羈**なる書生を圧束せず、」



26

新島の葬儀

- 生徒たちの出迎え
 - 新島の遺体が京都駅に着くのを深夜まで待つ。
- 若王子の墓地へ
 - 葬儀の後、生徒たちは、若王子山頂の墓地まで棺を交互に担いでいく。

28



29



30